

エレミヤ書6-8章 「主と相容れない偶像」

1A 北からの破滅 6

1B 鳴り響く角笛 1-8

2B 割礼のない耳 9-21

3B 産婦のような苦しみ 22-30

2A 主の家の偽り 7

1B 強盗の巢 1-15

2B 天の女王 16-29

3B トフェテの虐殺 30-8:3

3A 悔い改めをあきらめる民 8

1B 欺きへの執着 4-17

2B 直りようのない傷 18-22

本文

エレミヤ書6章から読みます。この預言は、3章6節から始まる説教の最後の部分です。ヨシヤ王の時代に、主が与えられました。北イスラエルがアッシリヤによって滅ぼされたのに、南ユダはそれを見ながら自分たちも偶像礼拝やその他の不正に手を染めました。そしてバビロンが彼らに襲ってくると預言しているのですが、一向に聞く気配がありません。なぜ彼らはそれほど悟りががないのか、愚かな民だと神ご自身も嘆いておられます。その流れに沿って、預言者や祭司までもが偽りを言って彼らを慰めています。そして6章に入ります。

1A 北からの破滅 6

1B 鳴り響く角笛 1-8

6:1 ベニヤミンの子らよ。エルサレムの中からのがれよ。テコアで角笛を吹き、ベテ・ハケレムでのろしを上げよ。わざわざと大いなる破滅が、北から見おろしているからだ。6:2 私は、シオンの娘を、美しい牧場になぞらえる。6:3 羊飼いは自分の群れを連れて、そこに行き、その回りに天幕を張り、その群れはおのおの、自分の草を食べる。6:4 「シオンに向かって聖戦をふれよ。立て。われわれは真昼に上ろう。」「ああ、残念だ。日が傾いた。夕べの影も伸びる。」6:5 「立て。われわれは夜の間に上って、その宮殿を滅ぼそう。」

エレミヤは、今、バビロンがエルサレムに攻め入ってくる幻をはっきりと見ています。ベニヤミンに語りかけておられますが、ベニヤミンの南端にエルサレムがあります。彼らは、ここに逃れてバビロンから守られようとしていましたが、そのエルサレムまでも破壊されるのをエレミヤは見ています。それで、そこからも逃れなさい、と言っているのです。テコアはエルサレムから南、ベツレヘムよりも南にある町です。ちなみに預言者アモスの町です。角笛や狼煙は、軍事的な伝達手段でありま

した。だから、エルサレムの中に入るのではなくて、さらにその南に行き、そこに逃れるように呼びかけなさい、と命じているのです。

そして、バビロンがエルサレムを襲うのを、美しい牧場に軍隊が襲ってくるように描いています。バビロン軍がいつ攻めてくるかの会話までも、エレミヤは聞いています。これはまさに、主の日にそのようになると言われていることです。「主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が『平和だ。安全だ。』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。(1テサロニケ 5:2-3)」

一昨日、ポーランドで起こったニュースで、線路上で立ち往生してしまったトラックがあり、列車の運転手が衝突は避けられないととっさに判断しました。それで何と、乗客のところにおいて猛ダッシュで、「椅子の下に隠れろ」と大声をあげて、さらに後ろの車両に走り抜けていく映像が流されました。幸いにも誰も重傷になることもなく、無事だったそうです。ちょうど主がエレミヤによってかけられている声というものは、このようなものなのです。迫りくる破滅に対して警告しているのですが、美しい牧場のように羊も羊飼いてもいない、一向に反応しない状態であります。

6:6 まことに万軍の主はこう仰せられる。「木を切って、エルサレムに対して壘を築け。これは罰せられる町。その中には、しいたげだけがある。6:7 井戸が水をわき出させるように、エルサレムは自分の悪をわき出させた。暴虐と暴行が、その中で聞こえる。わたしの前には、いつも病と打ち傷がある。6:8 エルサレムよ。戒めを受けよ。さもないと、わたしの心はおまえから離れ、おまえを住む人もない荒れ果てた地とする。」

バビロンによる侵略が迫っている時に、そこには虐げがありました。暴虐と虐げがあり、その報いとしてバビロンからの虐げを受けるという警告です。自分が蒔いているものを刈り取るという神の原則であります。そして、大事なのがそれがあぶり出されている、ということです。「井戸が水をわき出させるように、エルサレムは自分の悪をわき出させた。」とされています。彼らの破滅が近づけば近づくほど、彼らの中にある心の悪が湧き出ているということです。イエス様も、汚れは心から出てくると言われましたが、危機が近づけば近づくほど、主ご自身の聖さがはっきりするの、人の心にあるものも明らかにされていくのです。

しかしここで、主は彼らの悪を、「病と打ち傷がある。」とされています。これはイザヤ書の預言にもあり、イエス様は罪を犯している私たちが傷を負っており、病人であるから、ご自身でその傷を負ってくださり、その打ち傷が私たちが癒し、平安を与えたということを語っていました(53章)。私たちが罪を犯し、悪を行なう時、それは私たち自身が神のかたちに造られているのに、それを傷つける自傷行為なのだということを知るべきです。そして主は、「戒めを受けよ。」とされます。このような状態でもなおのこと、主は手を差し伸べておられます。

2B 割礼のない耳 9-21

6:9 万軍の主はこう仰せられる。「ぶどうの残りを摘むように、イスラエルの残りの者をすっかり摘み取れ。ぶどうを収穫する者のように、あなたの手をもう一度、その枝に伸ばせ。」6:10 私はだれに語りかけ、だれをさとして、聞かせようか。見よ。彼らの耳は閉じたままで、聞くこともできない。見よ。主のことばは、彼らにとって、そしりとなる。彼らはそれを喜ばない。6:11 私の身には主の憤りが満ち、これに耐えるのに、私は疲れ果てた。「それを、道ばたにいる子どもの上にも、若い男の集まりの上にも、ぶちまけよ。夫も妻も、ともどもに、年寄りも齢の満ちた者も共に捕えられ、6:12 彼らの家は、畑や妻もろともに、他人のものとなる。それは、わたしがこの国の住民に手を伸ばすからだ。…主の御告げ。…

主は、エルサレムの破壊が、全面的なもの、どの人たちも殺されて、あるいは捕えられるものであることを語られました。ぶどうの残りがあっても、その残りを摘み取るようなものであると仰っています。免れることはできません。私たちは、ここがとても受け入れられない真理です。「全て」の人が罪を犯して、「全て」の人が神の裁きに服さないといけないという切迫感です。この緊張に耐えられません。だから、「この人は良い人だから天に行くだろう。」と思いたいのです。あるいは、自分だけは大丈夫だという特別な措置をどういふわけか想定してしまいます。

そしてエレミヤは、自分自身の身に起こっていることも話しています。語っているのですが、まったく耳が閉じています。ここの耳が閉じるという言葉は、直訳は「耳に割礼がない」となっています。これは大切な表現であり、アブラハムの契約の民の印である割礼は、心の包皮、耳の包皮が切り取られ、御霊に敏感に反応できるようになることを表しています。外側の割礼があっても、内側の割礼がなければ無意味であるとパウロは、ローマ 2 章で話しました。そのために、彼らはエレミヤをそしりました。彼が意図していないことまでも語り、悪く言いました。使徒の働きでも、同じように語ったステパノが、「神殿を破壊しようとしている」という中傷を受けて、それでサンヘドリンの裁判を受けています(7 章)。そして憤りが満ちていますが、それで主が「それをぶちまけなさい」と言われます。

6:13 なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行なっているからだ。6:14 彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。6:15 彼らは忌みきらうべきことをして、恥を見ただろうか。彼らは少しも恥じず、恥じることも知らない。だから、彼らは、倒れる者の中に倒れ、わたしが彼らを罰する時に、よろめき倒れる。」と主は仰せられる。

預言者や祭司たちは偽りを言っていました。それは、「平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。」という偽りです。深刻な病があるのに、顔の表情だけ見て、「大丈夫です」と言っているような医者の姿であります。癌であるのに、風邪薬を与えているような姿であります。いろいろな偽りの平和があるでしょう。何か気分が良くなるような楽しい話をして、心の気が休まったらそれを

「平和」と呼びます。あるいは、このような聖なる神ではなく、罪も悪もすべて受け入れて、それでもいいんだよと言ってくれる神やイエス様を語ってくれたら、「平和」と呼ぶでしょう。また、「これからの将来は幸いになります。良くなりますから、それにしがみついて。」と言ったら、「平和」と呼ぶでしょう。そして、実際はそうではないことを知る時に、民も祭司や預言者もみな、そうではなかったことを知って「恥を見る」ことになります。

6:16 主はこう仰せられる。「四つ辻に立って見渡し、昔からの通り道、幸いの道はどこにあるかを尋ね、それを歩んで、あなたがたのいこいを見いだせ。しかし、彼らは『そこを歩まない。』と言った。6:17 また、わたしは、あなたがたの上に見張り人をたて、『角笛の音に注意せよ。』と言わせたのに、彼らは『注意しない。』と言った。

四つ辻に立って、幸いの道を見いだすという言い回しは、少し知恵について語ったソロモンの言いまわしに似ています(箴言 8:1-3)。そこにも、「道のかたわら、通り道の四つ角に」立って知恵が呼ばわっているとあります。それは平安の道です。また角笛の音は、目を覚まして用意していなさいという、警告の声であります。どちらも主が彼らの益、幸いのために語っておられるのですが、彼ら自身がそれを拒んでいます。

6:18 それゆえ、諸国の民よ。聞け。会衆よ。知れ。彼らに何が起こるかを。6:19 この国よ。聞け。見よ。わたしはこの民にわざわいをもたらす。これは彼らのたくらみの実。彼らが、わたしのことばに注意せず、わたしの律法を退けたからだ。6:20 いったい、何のため、シェバから乳香や、遠い国からかおりの良い菖蒲がわたしのところに来るのか。あなたがたの全焼のいけにえは受け入れられず、あなたがたのいけにえはわたしを喜ばせない。」6:21 それゆえ、主はこう仰せられる。「見よ。わたしはこの民につまずきを与える。父も子も共にこれにつまずき、隣人も友人も滅びる。」

シェバとはアラビア半島の南、イエメンのところにある王国でしたが、そこからの乳香を使って神殿礼拝に使っていたということです。つまり、いけにえの儀式は行なっているのですが、神のことばには気を使わなかったということです。神殿の儀式は行なっているけれども、神の命令はないがしろにしていました。それでつまずきが起こります。誰かにつまずいた、という言葉は私たちがしばしば聞きますが、各々が主に立ち返られないと、そうしたことが身近なところでもどんどん起こることになります。

3B 産婦のような苦しみ 22-30

6:22 主はこう仰せられる。「見よ。一つの民が北の地から来る。大きな国が地の果てから奮い立つ。6:23 彼らは弓と投げ槍を堅く握り、残忍で、あわれみがない。その声は海のようにとどろく。シオンの娘よ。彼らは馬にまたがり、ひとりのように陣備えをして、あなたを攻める。」6:24 私たちは、そのうわさを聞いて、氣力を失い、産婦のような苦しみと苦痛が私たちを捕えた。6:25 畑に出るな。道を歩くな。敵の剣がそこにあり、恐れが回りにあるからだ。6:26 私の民の娘よ。荒布を身

にまとい、灰の中をころび回れ。ひとり子のために苦しみ嘆いて、喪に服せ。たちまち、荒らす者が私たちに襲いかかるからだ。

バビロン軍が無慈悲にエルサレムの住民を剣で攻めてくる預言です。

6:27 「わたしはあなたを、わたしの民の中で、ためす者とし、試みる者とした。彼らの行ないを知り、これをためせ。」6:28 彼らはみな、かたくなな反逆者、中傷して歩き回り、青銅や鉄のようだ。彼らはみな、墮落した者たちだ。6:29 ふいごで激しく吹いて、鉛を火で溶かす。鉛は溶けた。溶けたが、むだだった。悪いものは除かれなかった。6:30 彼らは廢物の銀と呼ばれている。主が彼らを退けたからだ。

22-26 節の言葉をエレミヤが民に語ったところ、彼らがどのように反応したかを書いているものです。全く聞く耳を持たない、それからエレミヤのことを中傷して歩き回っていました。ここまで、彼らの心から汚れが取り除かれなかったということです。御言葉は、聖霊によって私たちに罪の自覚を与えます。それはあたかも、銀を精錬する清めの火のようです。そしてその言葉に応答する時に、私たちは変えられた人として生きることができます。けれども、神の言葉を聞いていても、示された罪について応答しないと、主との交わりそのものから退けられるという結果を招きます。

2A 主の家の偽り 7

そして7章から新たな預言、あるいは説教となります。

1B 強盗の巣 1-15

7:1 主からエレミヤにあったみことばは、こうである。7:2 「主の家の門に立ち、そこでこのことばを叫んで言え。主を礼拝するために、この門にはいるすべてのユダの人々よ。主のことばを聞け。

先の説教はエルサレムの町におけるものでしたが、今回はさらに中心部へと進んでいます。神殿の敷地です。その門の一つのところで、礼拝のために入っていくユダヤ人に主の言葉を語りました。そして時は既にヨシヤが死に、エホヤキムが王となった頃であると考えられます。なぜなら、26章にて、主の宮に礼拝しにくる人々にエレミヤが語っているその内容が同じだからです。26章ではその説教を聞いた人々の反応が書かれていて、祭司、預言者、一般の民が押しかけて、エレミヤを攻撃したことが書かれています。

7:3 イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。あなたがたの行ないと、わざとを改めよ。そうすれば、わたしは、あなたがたをこの所に住ませよう。7:4 あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮だ。』と言っている偽りのことばを信頼してはならない。7:5 もし、ほんとうに、あなたがたが行ないとわざとを改め、あなたがたの間で公義を行ない、7:6 在留異国人、みなしご、やもめをしいたげず、罪のない者の血をこの所で流さず、ほかの神々に従って自分の身にわざわいを招

くようなことをしなければ、7:7 わたしはこの所、わたしがあなたがたの先祖に与えたこの地に、とこしえからとこしえまで、あなたがたを住ませよう。

主がこの宮の中に住んでくださる、永久までも住んでくださるという約束を、ダビデやソロモンに対して神は語っておられました。しかし条件があります。それは主がモーセに命じられたように、公義を行なって、憐れみの業を行なって、主なる神にのみ仕えている時にそうなのだ、ということです。聖なる神が住まわれるということは、自分自身も神の聖さの中に留まっているからこそそうなのであって、そこから外れてしまったら交わりから外されてしまいます。

7:8 なんと、あなたがたは、役にも立たない偽りのことばにたよっている。7:9 しかも、あなたがたは盗み、殺し、姦通し、偽って誓い、バアルのためにいけにえを焼き、あなたがたの知らなかったほかの神々に従っている。7:10 それなのに、あなたがたは、わたしの名がつけられているこの家のわたしの前にやって来て立ち、『私たちは救われている。』と言う。それは、このようなすべての忌みきらうべきことをするためか。7:11 わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目には強盗の巣と見えたのか。そうだ。わたしにも、そう見えていた。…主の御告げ。…

「強盗の巣」というのはアジトのことです。強盗たちが身を隠すために集まっている場所です。イエス様が宮清めの時にこの御言葉を引用されました。彼らは、午前礼拝で話しました、間違ったところに救いの保障を求めています。主の宮に来ていること自体が、自分たちの救いであるという偽りの言葉がありました。それで午前には、教会に来ていること自体で安心してはいけないのだということを話しました。キリストの愛、その流された血潮から流れる清めの中に生き、そしてキリストの戻って来られる望みによって支えられ、互いに愛するという中にいるからこそ、聖なる御霊が私たちに留まっていてくださるのです。

7:12 それなら、さあ、シロにあったわたしの住まい、先にわたしの名を住ませた所へ行って、わたしの民イスラエルの悪のために、そこでわたしがしたことを見よ。7:13 今、あなたがたは、これらの事をみな行なっている。…主の御告げ。…わたしがあなたがたに絶えず、しきりに語りかけたのに、あなたがたは聞こうともせず、わたしが呼んだのに、答えもしなかった。7:14 それで、あなたがたの頼みとするこの家、わたしの名がつけられているこの家、また、わたしが、あなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの場所に、わたしはシロにしたのと同様なことを行なおう。7:15 わたしは、かつて、あなたがたのすべての兄弟、エフライムのすべての子孫を追い払ったように、あなたがたを、わたしの前から追い払おう。

「シロ」は、エルサレムの北、ベテルとシエケムの間にある、以前神の幕屋があった場所です。サムエルの両親はシロに上って、主を礼拝していました。その時の祭司はエリです。彼らの時代に、イスラエルにとっての悲劇が起こりました。契約の箱がペリシテ人に取られてしまったことです。エリの息子、ホフニとピネハスは主の幕屋の奉仕において悪を行なっていました。民のいけにえを奪

い取ったり、会見の天幕の入口で奉仕している女たちと寝ていたりしました。そして、彼らは契約の箱をお守りのようにしていました。ペリシテ人と戦う時に、契約の箱を持って行きさえすれば主が共におられて勝つことができる、と思いました。けれども結果は燦々たるものであり、契約の箱は奪われ、神の栄光は去ってしまいました。(1サムエル 2-4 章)同じように私たちも、心の変化、一新が必要なのに、それから目を逸らして他の活動で補おうとしているのであれば、イエス様ご自身の臨在がそこからなくなってしまう、ということは知らないといけません。

2B 天の女王 16-29

7:16 あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり、祈りをささげたりしてはならない。わたしにとりなしをしてはならない。わたしはあなたの願いを聞かないからだ。7:17 彼らがユダの町々や、エルサレムのちまたで何をしているのか、あなたは見ていないのか。7:18 子どもたちはたきぎを集め、父たちは火をたき、女たちは麦粉をこねて、『天の女王』のための供えのパン菓子を作り、わたしの怒りを引き起こすために、ほかの神々に注ぎのぶどう酒を注いでいる。7:19 彼らはわたしの怒りを引き起こすのか。・・主の御告げ。・・自分たちを怒らせ、自分たちの赤恥をさらすためではないか。」7:20 それで、神である主はこう仰せられる。「見よ。わたしの怒りと憤りは、この場所と、人間と、家畜と、畑の木と、地の産物とに注がれ、それは燃えて、消えることがない。」

16 節の「民のために祈ってはならない」という発言は爆弾ですね。主ご自身が、執り成しをするなどエレミヤに命じておられます。しかし、これは正しいことなのです。明らかに神の御心に反することを行なっているのに、その祈りに答えられるはずがありません。私のところに、例えば、同棲をしている男女が来るとします。その二人の生活が祝福されるように祈ってくださいと言われてたら、「いいえ、祈ることはできません。」と断るでしょう。なぜなら主の御心は、同棲をやめて、離れることです。

ここでは、彼らが「天の女王」をあがめている様子が書いてあります。これは、バビロンのイシュタルのような偶像ではないかと思われれます。カナン人の「アシュタロテ」も同類の女神です。性愛の神です。興味深いことに、世界の宗教では必ず「女神」が持ち込まれます。神道では天照大神、仏教では観音は女性化しています。キリスト教もまたそうですね、マリヤが神の母となり、実質、イエス様以上の存在になっています。そして、この崇拝を家族ぐるみで行っていました。家の中で行っていることだったので、それが一つの制度となっていてなおさらのことやめることをためらわせたのでしょう。

7:21 イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「あなたがたの全焼のいけにえに、ほかのいけにえを加えて、その肉を食べよ。7:22 わたしは、あなたがたの先祖をエジプトの国から連れ出したとき、全焼のいけにえや、ほかのいけにえについては何も語らず、命じもしなかった。7:23 ただ、次のことを彼らに命じて言った。『わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしは、あなたが

たの神となり、あなたがたは、わたしの民となる。あなたがたをしあわせにするために、わたしが命じるすべての道を歩め。』

主は何度となく、預言者によって、「主の御声に聞き従うことが、全焼のいけにえにまさる」という話をしておられました。サムエルがサウルに語ったし、預言者イザヤも語り、その他の預言書を読んでも語っています。主からの御霊による声を聞くからこそ、礼拝と献身が意味をなすのであって、それがなく行なっているのでは意味がないのですが、それはいけにえの制度を神が語られた時のことを思い出せば自ずと分かるのです。レビ記において、すなわちシナイ山の麓において主は、モーセにいけにえについての教えを行われました。しかし、主が初めに語られたのはここにあるように、「わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしは、あなたがたの神となり、あなたがたは、わたしの民となる。」ということなのです。

7:24 しかし、彼らは聞かず、耳を傾けず、悪いかたくなな心のはかりごとのままに歩み、前進するどころか後退した。

非常に残念なことです。初めに聞いた時よりも後退してしまいました。初めに福音を聞いた時よりも、今の状態が後退しているとしたらそれは悲劇的です。

7:25 あなたがたの先祖がエジプトの国を出た日から今日まで、わたしはあなたがたに、わたしのしもべであるすべての預言者たちを、毎日朝早くから、たびたび送ったが、7:26 彼らはわたしに聞かず、耳を傾けず、うなじのこわい者となって、先祖たちよりも悪くなった。7:27 あなたが彼らにこれらのことをすべて語っても、彼らはあなたに聞かず、彼ら呼んでも、彼らはあなたに答えまい。7:28 そこであなたは彼らに言え。この民は、自分の神、主の声を聞かず、懲らしめを受けなかった民だ。真実は消えうせ、彼らの口から断たれた。7:29 『あなたの長い髪を切り捨て、裸の丘の上で哀歌を唱えよ。主は、この世代の者を、激しく怒って、退け、捨てたからだ。』

主はずっと、何と毎日朝早くから預言者たちを送られたと言われます。朝に主の声があるということは、霊的に行動できる第一歩です。私は朝、布団をあげるのが遅いのですが、「はやく布団をあげて。」という妻の声に後押しされてあげています。けれども、布団をあげないことには、その後の一日の行動が取れませんから、その声は大事です。同じように、神はあまりにも明らかに御心を示してくださっています。そして、ユダの民は主の声に聞き従わないので、裸の丘の上、すなわちバビロンによって荒れ果てた地の上で哀歌を唱えます。

3B トフェテの虐殺 30-8:3

7:30 それは、ユダの子らが、わたしの目の前に悪を行なったからだ。主の御告げ。彼らは、わたしの名がつけられているこの家に自分たちの忌むべき物を置いて、これを汚した。7:31 また自分の息子、娘を火で焼くために、ベン・ヒノムの谷にあるトフェテに高き所を築いたが、これは、

わたしが命じたこともなく、思いつきもしなかったことだ。

エルサレムで彼らが行っていた偶像礼拝は、行く所まで行ってしまいました。カナン人やモアブ人の風習で行っていた、幼児犠牲をエルサレムのど真ん中、ヒノムの谷で行っていたのです。ヒノムの谷は、神殿の丘の南にあります。マナセがそれを導入し始めたことが列王記第二にかかれています。これは基本的に、鉄で作られた神ケモシュの記録がありますが、それを火でたいて熱くします。その真っ赤になった腕に、赤ん坊を置きます。その泣き声を打ち消すために太鼓を叩くというものです。

「トフェテ」と言いましたが、トフェテは「燃やす」とも訳すことができるし、「太鼓」とも訳すことができる言葉です。子供を火で燃やす時に、その泣き声をかきけすために太鼓を打ち鳴らしていました。これは今の、中絶と同じ概念です。自分たちの快樂のために妊娠したその子を、外に出して殺すか、あるいは子宮の中でいのちを立つかのどちらかであります。そしてヨシヤの時代に、トフェテを汚したと書いてあります(2列王 23:10)。そこでいけにえを捧げられないようにしたということですが、ごみ焼却所にしたと思われる。そこから火が絶えず出てくることから、新約聖書では「ゲヘナ」とイエス様が呼ばれ、いつまでも火が消えることのない地獄の呼び名とされました。

ところで主は、「わたしが命じたこともなく、思いつきもしなかったことだ。」と驚きを隠せません。これはもちろん主がその情報を知らなかったということではありません。人の悪は、想像を超えるようなところにまで発展するということです。

7:32 それゆえ、見よ、その日が来る。…主の御告げ。…その日には、もはや、そこはトフェテとかベン・ヒノムの谷と呼ばれない。ただ虐殺の谷と呼ばれる。人々はトフェテに、余地がないほどに葬る。7:33 この民のしかばねは、空の鳥、地の獣のえじきとなるが、これを追い払う者もない。7:34 わたしは、ユダの町々とエルサレムのちまたから、楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声を絶やす。この国は廃墟となるからである。8:1 その時、…主の御告げ。…人々は、ユダの王たちの骨、首長たちの骨、祭司たちの骨、預言者たちの骨、エルサレムの住民の骨を、彼らの墓からあばき、8:2 それらを、彼らが愛し、仕え、従い、伺いを立て、拝んだ日や月や天の万象の前にさらす。それらは集められることなく、葬られることもなく、地面の肥やしとなる。8:3 また、この悪い一族の中から残された残りの者はみな、わたしが追い散らした残りの者のいるどんな所でも、いのちよりも死を選ぶようになる。…万軍の主の御告げ。…」

バビロンがエルサレムを滅ぼした後で、この谷がどのようなことになるかを教えておられます。彼らが虐殺され、その死体を積み上げるために使われるということです。葬られもしないので、鳥獣のえじきとなり、これは当時の人、中東の人にとっては耐えがたいこと、死んだ後の葬られ方に尊厳を見いだしているのが、究極の裁きになります。そして主はこれを、天の下に晒すということで、自分たちの行っていた星占いのようなもの、それに対する裁きにもなっています。このような裁

きは終わりの日に主がご自分に逆らう諸国の軍隊に対して行なわれるのであって、それをご自分の民が受けなければいけないというのは、神にとって屈辱的なことであつたでしょう。もっともしくないことでありました。さらに生き残ったとしても、その追い散らされた所で悲惨な目に遭います。

3A 悔い改めをあきらめる民 8

ここまで主が宣言をされました。けれども、ユダの民は悲しむのですが、悔い改めない姿がこれ以降に書いてあります。そうです、今の状態を悲しみ嘆くことはあっても、悔い改めないままにいるということはありません。

1B 欺きへの執着 4-17

8:4 あなたは、彼らに言え。主はこう仰せられる。「倒れたら、起き上がらないのだろうか。背信者となったら、悔い改めないのだろうか。8:5 なぜ、この民エルサレムは、背信者となり、背信を続けているのか。彼らは欺きにすがりつき、帰って来ようとしぬい。

自分は背信者となった、だから、もう背信者という烙印の中で生きていくしかない、ということです。主がこれだけ語られたのは、ご自分のところに戻ってきなさい、帰りなさいという呼びかけであつたのに、それを運命や宿命であるかのように、「お前はもうこういう状態なのだから、滅ぼされる定めになるのだ。」と聞いて、それで背信を続けているのです。

8:6 わたしは注意して聞いたが、彼らは正しくないことを語り、『私はなんということをしたのか。』と言って、自分の悪行を悔いる者は、ひとりもない。彼らはみな、戦いに突入する馬のように、自分の走路に走り去る。8:7 空のこうのとりのも、自分の季節を知っており、山鳩、つばめ、つるも、自分の帰る時を守るのに、わたしの民は主の定めを知らない。

この前に、逆巻く波が海の境界線を守っているのに、この民には逆らう心があると主は言われました(5:22-23)。ここも同じです。季節が変われば方向も変える渡り鳥がいます。ですから、いつまでも同じことを行なわないで、主に帰るといふ方向転換をすればよいのです。ところが、彼らは「これをやってきたのだから、もうこれしかないのだ」と決めてしまっています。

8:8 どうして、あなたがたは、『私たちは知恵ある者だ。私たちには主の律法がある。』と言えようか。確かにそうだが、書記たちの偽りの筆が、これを偽りにしてしまっている。8:9 知恵ある者たちは恥を見、驚きあわてて、捕えられる。見よ。主のことばを退けたからには、彼らに何の知恵があるろう。

そうです、主の律法があるというのは事実です。けれども、律法があるということ自体は、何ら彼らと主との関係を保障しません。律法を自分に教えて、行なわなければ意味をなしません。「偽りの筆が、これを偽りにしてしまっている」と言っています。第一に、律法に命じられている通りに生

きていない、ということがあります。そして第二に、律法に命じられていることを歪曲して教えている、ということがあります。自分たちの生活、罪の生活を正当化できるように、聖書の言葉の解釈を変えてしまうのです。

8:10 それゆえ、わたしは彼らの妻を他人に与え、彼らの畑を侵略者に与える。なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行なっているからだ。8:11 彼らは、わたしの民の娘の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。8:12 彼らは忌みきらうべきことをして、恥を見ただろうか。彼らは少しも恥じず、恥じることも知らない。だから、彼らは、倒れる者の中に倒れ、彼らの刑罰の時、よろめき倒れる。」と主は仰せられる。

「利得をむさぼっている」と言っていますが、これは自分の利益になるかどうかを計算して付き合っているということです。そして、そうした自己追求に対して間違っていると言わずに、それでよいのだとしてしまうこと。これが偽りの預言です。

8:13 「わたしは彼らを、刈り入れたい。…主の御告げ。…しかし、ぶどうの木には、ぶどうがなく、いちじくの木には、いちじくがなく、葉はしおれている。わたしはそれをなるがままにする。」

主ご自身の激しい葛藤を見ることができます。滅ぼさないといけないと言いながら、それでもなおのこと、彼らから何か実がないかを探しておられます。エルサレムに入られる時に、イエス様がいちじくの木からの実があるかどうかご覧になったけれども、葉しかなかったのも、それで呪われてしまったのと同じです。これが主の心です。いつまでも悔い改めないのを知っていながらも、憐れみの御手を差し出し、悔い改めることを願われます。

8:14 どうして、私たちはすわっているのか。集まって、城壁のある町々に行き、そこで死のう。私たちの神、主が、私たちを滅ぼす。主が私たちに毒の水を飲ませられる。私たちが主に罪を犯したからだ。8:15 平安を待ち望んでも、幸いはなく、癒しの時を待ち望んでも、見よ、恐怖しかない。

とても興味深い発言です。ここで一見、彼らが罪を犯したことを悔いているように聞こえます。しかしそうではなく、運命的に語っているだけなのです。どうせ、私たちは主に罪を犯したのだ。平安もこないし、ただ主は私たちに毒の水を飲ませられるのだ。エレミヤが言っているように。というように、あきらめて、自暴自棄になって、落ち込んでいるにしかすぎません。

8:16 「ダンから馬の鼻息が聞こえる。その荒馬のいななきの聲に、全地は震える。彼らは来て、地と、それに満ちるもの、町と、その住民を食らう。8:17 見よ。わたしが、まじないのきかないコブラや、まむしを、あなたがたの中に送り、あなたがたをかませるからだ。…主の御告げ。…」

ダンにはイスラエルの北端の町です。北からバビロンがエルサレムに向かってきています。そして制御できない毒蛇のように、バビロンはユダの民を噛み殺します。

2B 直りようのない傷 18-22

8:18 私の悲しみはいやされず、私の心は弱り果てている。8:19 聞け。遠くの地からの私の民の娘の叫び声を。「主はシオンにおられないのか。シオンの王は、その中におられないのか。」「なぜ、彼らは自分たちの刻んだ像により、外国のむなしいものによって、わたしの怒りを引き起こしたのか。」8:20 「刈り入れ時は過ぎ、夏も終わった。それなのに、私たちは救われない。」

本当に悲しいことです。エレミヤが悲しみ、心が弱り果てていますが、それは主が語られていることを一切聞かないのに、彼らが主に自分の嘆きを訴えているからです。バビロンが襲ってくるということについて、「主はここにはおられないではないか。」と嘆いています。けれども、彼らが偶像を捨て去ればよいのです。ところが、そのことについては聞かず、「いつまでも救われていない。」と嘆いています。

8:21 私の民の娘の傷のために、私も傷つき、私は憂え、恐怖が、私を捕えた。8:22 乳香はギルアデにないのか。医者はどこにいないのか。それなのに、なぜ、私の民の娘の傷はいやされなかったのか。

エレミヤが彼らの傷を自分の傷のように痛んでいます。ギルアデは、ヨルダン川東側の地域ですが、そこには医薬として用いられる乳香がありました。すぐそばにあって簡単に入手できそうなのに、できないというもどかしさを表現しています。

このエレミヤは、後にくるキリストを表しています。キリストがその傷をご自身に負ってくださるのです。そしてユダの民も、キリストによる新しい契約へと導いています。自分の罪は自分では直しようがないのだというあきらめです。モーセの契約は自分の肉で守ることができないのだ、まずキリストが律法を完成し、キリストにあって御霊が与えられ、新しくされて初めて主を喜ばすことができるのだ、ということでもあります。